



訓練犬の飼育を始めた柳本社長(左)

レザックの柳本社長

今春、社会貢献事業を始動

【東大阪】抜き型業界向けCADシステムやレーザー加工機の有力メーカー、レザック(大阪府八尾市、072・995・0394)の柳本忠二社長が計画する社会貢献事業が今春に

介助犬サービス準備着々

動きだす。グループ会社のアイ・ティイー・エム(I・T・M、大阪市天王寺区)でパートナー・ドッグ・トレーニング事業部を4月に設置、介助犬の訓練・管理業務を始める。今後2年間で運営体制を整備し、国内では珍しい宅内介助犬サービスの展開を図る。

レザック創業者の柳本社長は65歳を迎える2010年をめどに退任する意向を固めており、一方で本業と異なる宅内介助犬サービスの構想を練ってきた。事業の準備金は約10億円で年間約5000万円の運用益を作り、同サービスを行う計画。訓練犬は回収作業を得意とするラブラドル・レトリバーに決め、社内などで飼育を始めた。

寝たきり高齢者の介護も想定し、簡単なボタン操作で犬への行動指示が遠隔で行える独自の通信システム(特許申請中)も考案した。事業を始めるには各都道府県への登録が必要で、動物取扱責任者の配置も義務づけられている。ドッグトレーナーとして1人がITMに入社し、3月には動物訓練経験を持つ専門学校生2人を採用する。柳本社長自身も07年12月に動物取扱業の試験を受け、関連資格を取得した。

犬の訓練・管理に使う専門施設として、名阪国道の小倉インターチェンジ(奈良県小倉町)近くに敷地面積3300平方メートルの物件も購入し、活動拠点にしている。柳本社長は「宅内介助犬サービスは事業とは切り離し、ボランティアで行っていきたい」としている。